

主題：中国コロナ禍での現地調査に立ちはだかる二つの壁

—副題：10. 5pt ゴシック・中央揃—

○ 静岡大学 氏名 内山 智尋 (009776)

キーワード3つ：中国、コロナ禍、ヒアリング調査

1. 研究テーマについて

博論テーマ：「中国社区の高齢者ケアにおける福祉コミュニティ形成の可能性に関する研究 —ガバナンスと住民参加に注目して—」

中国の高齢化率は13.5%（2021年）であり、高齢社会突入を目前に急ピッチでシステムの構築など整備を進めている。日本と同様に社会保障費が財政を圧迫することへの懸念から、在宅介護を主な方法とし、それを支えるための社区形成や社区养老服务体制の構築に力を入れている。つまり、中国も社区（地域）福祉を発展させ、福祉コミュニティ形成を目指しているといえ、本研究はその前提にたち議論を深めている。

全体の構成は以下のようになっている。

- 1) 福祉コミュニティ形成に必要な視点、要素について明らかにし、プロジェクトデザインとしての枠組みを提示する（第1章、第2章、第3章）
- 2) プロジェクトデザインを活用し、中国と日本それぞれにおける調査を通じて特徴や課題について明らかにする（第4章、第5章、第6章）
- 3) 日本と中国の実態に対するそれぞれの評価や日本からの示唆に基づいて、中国の福祉コミュニティ形成の可能性を検討し、最後に、中国社区の高齢者ケアにおける福祉コミュニティ形成に向けて提言をおこなう（第7章、終章）

中国の実態については、中国北京市にある8カ所の機関や組織におけるヒアリング調査を通じて、特徴や課題を導き出している。果たして中国の社区において福祉コミュニティ形成の可能性はあるのだろうかという本論文で明らかにすべき問いかけに対し、実現を図るまでには多くの課題を克服する必要があることを指摘しつつ、いくつかの萌芽がみられるとしている。

2. 直面した危機・困難と研究遂行における苦労・苦悩

■新型コロナ蔓延のなかでの現地調査

2020年1月下旬に新型コロナが中国国内に蔓延し始めたころ、私は中国北京市に勤務していた。中国はどの国よりもコロナ対策が厳しく、出勤するオフィスの管理体制の強化、スーパーなどの健康チェック、レストランの閉鎖など制限の多い生活を強いられる状況であった。新型コロナ蔓延の初期段階では完全に移動が制限されていたため、調査活動は不可能であったが、落ち着きを取り戻し始めた夏頃、少しずつ調査対象機関と連絡を取

り始めた。規制は緩和されつつあったが、管理体制が依然厳しく、ヒアリング調査を実施するのは容易なことではなかった。また、外国人というだけでも受け入れない機関が多い中、コロナを理由に訪問を断る機関も多く、一度は受け入れを許可した機関も直前でキャンセルするなど最後まで予断を許さない状況が続いた。このように、ヒアリング調査の対象地区の選定にあたり、多くの時間と労力を費やすことになった。2つの壁（コロナと外国人）によりどこの機関も受け入れには慎重であり、なかなか許可を得ることができなかった。

3. 研究遂行における工夫や課題

■ 調査実施における手段や工夫

このような状況の中、現地調査を実現するためにあらゆる手段を試すことになる。まず、私は長年中国で仕事をしてきた経緯があり、仕事関係の知り合いも少なくなく、関係者のネットワークを頼ることを試みた。仕事関係の知り合いは行政機関がほとんどであり、彼らのネットワークを通じていくつかの調査を実現することができた。一方で、彼らも周囲からのさまざまな監視がある困難な状況であり、直前で断られたケースもあった。

2つ目は、大学院時代の知り合いのネットワークを通じて関係機関に連絡を取った。この知り合いは、政府機関でかなり政治的な力のある人物でもあったため、このネットワークは極めて有効的であった。

3つ目は、ちょっとした工夫であるが、実際にアポイントをとり訪問した際には、訪問先が関心をもつであろう日本の状況についてもできるだけ詳細に説明し、彼らの関心や興味を高めることで2回目の訪問へとつなげた。調査において、相手の状況を聞くだけに留まらず、日本の関連する有用な情報、例えば、制度や最近の動向などを伝えることで双方向の交流ができ距離が一気に近くなる。

4つ目は、SNSの活用である。訪問先では、必ずWechatを交換し、質問があればいつでも聞ける環境を整えた。実際に、訪問後に聞き忘れたことを質問したり、先方からも日本の関連する資料を送って欲しいなどと依頼され、何回かのやりとりが続いた。現在はほとんど連絡は取っていないが、連絡先は登録されているため、再度連絡することも可能である。

その他、考えられる対策としては、例えば同窓生の中国人先輩等にサポートを依頼することである。同窓生であれば、外国人が異国で調査をすることが如何に難しいものであるか理解しており、また中国という特殊な環境についても充分に分かっているため、サポートを得やすい可能性がある。

4. 学会への要望など

特になし